

# 母の履歴書

高橋玄洋

ラジオ（夜のドラマ懸賞募集当選作品）  
放送日 昭和29年11月4日  
番組名 夜のドラマ  
制作 新日本放送  
演出 庄野 至

テレビ  
放送日 昭和34年2月28日  
番組名 テレビ劇場  
制作 NETテレビ  
演出 高橋 玄洋

登場人物  
きん 近松 良枝  
仙子 海老原響子  
松山 永山 大樹

## 1 長屋の住居

操車場の近くらしく、連結作業の貨車が次々にショックを伝えてゆく。

(機関車の警笛、ブレーキなど)

母のきんが若い松岡と話している。

きん びつくりしんさつつろう。大変なところで。

松岡 い、いえ……とんでもない……でも駅に近くていいですね。

きん はい、それだけが取り得といえれば取り得で。

松岡 では、もう遅いですから！

きん ま、まだええでしょう。折角お出でたんですけえ。

松岡 いえ、電車がなくなるといけませんから……これで。

きん そうですか、……本当に御親切に送って来てもらうて、仙子、仙子、はあお帰り

なんじやと。……あ、そうそ、おはぎを一つ持って帰って下さい。

仙子、出て来る。

仙子 お母さん！（睨む）

きん 若い人はお腹がすくもんじや。（台所へ去る）

松岡 いいお母さんじゃないの。

仙子 ……。

松岡 今日のこと、もう一度よく考え直してみてくださいよ、ね。

仙子 ……。

きん （戻って来て）わしが作ったんですけえ、おいしゅうはなかるうが一つ。

松岡 いただきます。

きん ま、これにこりんと又来てやってつかあさい。

松岡 はい、じゃ、失礼します。

きん 失礼しました。……仙子、駅まで。

松岡 いえ、いいんです、いいんです。お休みなさい。

きん はい、お休みなさい。

音楽、静かな夜の情感をはらんで飄々ヒョウヒョウと流れる。

(決して暗くない)

B・G

## 2 枕木の柵がある露地

タイトルOL

母と子、蒲団を並べて寝ている。

きん (横になつてる声で) もう家へ着きんさつたろうナ、松岡さん。

仙子 (これも天井に対して) 着いたでしょ！

きん わざわざ送って呉れんさらんでもええののう。

仙子 (投げやりに) 自分が誘ったんだもの、当り前よ。……今日の映画凄かったわ。

東京が水爆の攻撃うけてどろどろになって了うの。勿論人間なんか一人もいやしない。

ひどい話……本当よ。

きん 誰も嘘だなんて云ってやせんよ。

仙子 (話を変えて) ね、母ちゃん、人の顔に見えん？

きん ああ、あれかい。

天井の木目と雨もりのシミである。

仙子 そう見える、母ちゃんにも？……おいしいわネ、右の節も抜けると眼が二つ揃うて面白いのに……。

きん 母さんもそう思うけど、せんだけよ。

仙子 なあんだ。

きん 二十年の余も、この天井眺めて来たんじゃないもん。

仙子 ウチ初めて気が付いた、どうして云うて呉れなんだン？

きん そげな、馬鹿なこと……云うとる暇なんぞ無かったもん。

機関車、すぐ近くでブレーキ。

仙子 何でこんな家借りたんじゃろ。よりによつて操車場の脇なんか……。

きん そりやお前、……お前から三人に汽車見せてやろう思うてさ。

仙子 よう云わんわ、……洗濯には煤がつくし、夏は窓も開けられん代りに、冬は隙間だらけ……一日ゴキゴキゆすられて……。

きん 全く、よう持つもんじゃやて。

仙子 長生きするわよ、母ちゃん。

きん 馬鹿、ここじゃけん助かったんじゃないか。

仙子 ピカドン？

きん 操車場の向うまで、そりやあ凄い火の廻りようじゃったもん……この線路がお前らの命を助けてくれよったンよ。

仙子 その代り向う側は、きれいな家がズラツと並んだわ。

きん ……あの頃だつて、向うとこつちじや踏切り一つで家賃が大分違うたもんよ、……

……ギザ一枚の家なんぞ、ザラには無かったもん。

仙子 私が三つ位い……？ ここへ来たの……。

きん そう、四つ位いかのう。

仙子 父さんて人、よくよく甲斐性が無かったンネ。

きん だけど、ええ家を沢山<sup>あせうさん</sup>建てんさった人よ。

仙子 なんぼええ家だつて、他人<sup>ひと</sup>の家を建てたんじゃ仕様もない。……今日は大分冷えるね。(肩の辺りをモゾモゾさせる)

きん お前がゴソゴソするけんよ、母さんみたいにじつとしててみい。

仙子 どう向いてもスウスウするわよ。

きん 健一のこと考えてみんさい。

仙子 機関車の前で旗振つてる時は、ぬくいんよ、案外……。

きん 貨車についてるとる時は冷いよ。まともに受けるんじゃないや、この風を……これからが大変じゃ、十二月、一月、二月……墓所も寒かろう……。

仙子 姉ちゃん？

きん 姉ちゃんは、変り目ちゆうと決つて腹あこわして青洩垂れよつたでなあ。……こんな家へ嫁入つて来た当座なんぞ、蚊や蚤<sup>のみ</sup>には負けるし、そん跡がオデキになつて仲々乾きやせんし、……こんなに育てにくい子は、知らん思うた。

仙子 子供の居る家なんぞ、よう来る気になつたネ、母ちゃん。

きん 旦那様からの話じゃったもん。

仙子 旦那様って、母ちゃん女中に行ってた云うてた……？

きん あ、お父っあん、お屋敷お抱えの棟梁だったんさ。

仙子 見初められたか！

きん プロポーズ！ 云うんじやろ、今の英語じゃ……。

仙子 プロポーズ！……なんぼ英語でも昔と変わるわけないじゃない。

きん どうした？ 今夜は、変につんつんして……。

仙子 (答えず) 姉ちゃんの母さん、何で死んだん。

きん オコリじゃげな、今で云やあマラリヤよう……お琴さん云うて髪の毛の薄い弱そうな人じゃった。

仙子 母ちゃん知つとるん。

きん 来た時分にや、写真飾ってあったもん……姉ちゃんも生れた時に、はあ長ごうは持たん云われてたんと……こうまいくせに大人みたいなませた顔してナ。

仙子 じゃ、十三までが、よう持ったんネ。

きん あれさえ無けりやあ、戦争さえ……も一寸<sup>ちつた</sup>あ生きられたんよ。……育ってみりや、だんだん欲が出るけんう。……芋ばっか食わしてからに……運の悪い子よ。

音楽、静かに入って、

きん あん時は、よう歩いたなあ、煙のくすぶつとる中を……段原から紙屋町・千田町・御幸橋と運動場みたいに、グルグルグルグル、何辺廻ったろう。……お前の手をひいて……お前も又、よう聞きわけて歩いてくれた。七つ位だったんかのう。あの時は……

……。(音楽カット)

仙子 父さん戦争に行つたん、十八年……と、ウチ(指を折って)五ツン時ね、顔なんか一寸も覚えとらんわ。

きん 滅多に戻つて来なんだけえ、あの頃は父さん。

仙子 ああ、健子の母さんとこへ行きつきりだったんよネ。

きん 健子のおっ母さんて人は、又綺麗なかつたけえのう。

仙子 (腹立たしく) そりや、母ちゃんのヒガラ目よりや誰だつて綺麗に決つとる。

きん 何時からそげン口悪うなつた、この子は。

仙子 父さんて男、甲斐性なしのくせに、女グセだけは達者だったんネ。

きん 職人氣質<sup>かたぎ</sup>の人じゃつたけえ、女好きしたんさ。……なんぼ遊んでも、仕事だけは確かなもんだつた。台所の棚でもみい、未だ一寸も狂うてせんけえ。

仙子 だつて、あの棚、何も乗せられんじやない。

きん そりや、家ごとガタガタ揺れるけえ物が落ちるんよ、仕様ないさ。

仙子 乗せられにや、なんぼ威張つたつて棚とは云えんわよ。……そうよ、父さんて、あの棚みたいな男だったんネ、立派な腕持つてながら、洒ばっかし飲んで……。

きん 何ちうこと云うんじやろ、この子は、仏様に向うて……。

仙子 なんぼ仏様でも、ウチ父さんとも思うとりやせんけえ、悔しうないん母ちゃん？ 三人も子供ばっかしおッ被されて……。ウチの覚えとるのは、赤い顔して母さんブツツた怖い男だけよ。

きん ああ、あの拳骨は痛かつた。金鎚使うみたいに力入れるんじやもん。……一寸ク

ギを一叩きで打込む腕じゃもんナ。

仙子 酒癖の悪い人って大嫌い！

きん 酒は気狂い水よ。

仙子 母ちゃんて、何か肝腎なものが抜けとるんネ。

きん 何さ？

仙子 底抜けの樽よ、母ちゃん。

きん それ程、太っちゃおるまいで。

仙子 お話にならないわ、全く……。

きん (気を変え) 飲むか、押込みの奥に一寸ばかりあるじゃ、チューが。

仙子 母ちゃん、焼酎なんか飲んどるん？!

きん あれから癖になって了うて、……チンドン屋に行きよった頃、決して御神酒おみきが出たけえ……ナ。

仙子 全く手におえん不良ネ、……飲みたけりや持つといでよ、ウチは嫌。

きん 止そう今晚は、健一、夜勤じゃけえ。

仙子 健チも隠れて飲んでたわよ、何時だったか……。

きん お前知つとったんか、仙子には見つからんようにせえ、いうて、あれ程云うとつたのに……。

仙子 どうして？ 五月蠅いから私が？

きん もう一人前の働きするんじゃもん……寒いんには一番の薬よ。

仙子 狂い水がもう薬になるの、へえ、……随分、甘いんネ、健チには……。

きん あの子は、よう母さんの云うこと聞いてくれるもん。

仙子 まるで、ウチの方が継子ネ、……じゃけん、生意気になって、口答えなんかするんよ、今に父さんの代りに、ぶたれるけん母ちゃん……健チにぶたれてならやまぶし檜山節へ連れて行かれるけん。

きん まさか……。

(風が出て来たらしい)

仙子 母ちゃん。

きん (ねむそうに) 何だ。

仙子 ウチは、ウチは本当に、本当の母ちゃんの子でしょ？

きん ああそうだ、……どうして？

仙子 だって、姉ちゃんも違う。健チも違う……。

きん 生憎さま、仙子は母さんのお腹から生れたんさ。

仙子 証拠がある？

きん 馬鹿云うもんじゃない！ 証拠がなけりや、お前は母さんの子でないのかい。

仙子 ……。

きん 証拠はちゃんと有るさ、……その平べったい鼻、その広い頬ぺた……よう鏡見て

みい。そよな奇妙おかしげな顔が、やたら誰彼から貰えると思うんかい。

仙子 そう云えばそうネ(暫く間をおいて笑い出す) フッフフ、ハハハハハ、(一層込みあげてくる) ……成程、この鼻は、確かに母ちゃんの専売特許ね、ハハハハ……。

きん 笑いごとじゃないよ。(と言いながらも笑って了う) 馬鹿な子だ！

仙子 でも、どうして仙子なんて名前付けて呉れたん？ 映画見に行っても、〃おせんにキヤラメル〃 って廻つて来ると、ドキンとなつちやう。

きん …… 母さんのおきんよりやええよ、…… 金時さんじゃあるまいし、…… お蔭で、一生金にや縁がないンじゃ。

仙子 名前負けネ。

きん …… さあ、寝にや。

仙子 何だか目が冴えちやつた。

遠く夜鳴きそばが通つてゆく。

きん 先刻ラジオが云うてた、虫下しの調合を間違えて買うて帰つた人…… もう判つたかねえ。

仙子 …… ん…… きつと判るわよ…… あら何か音せなんだ？

きん 風だろ…… 明日、柱んところ目張りしよう。

仙子 …… あら？ (不思議そうに) あら…… 本当だわ、母ちゃん母ちゃん、枕が何か言つてるわ。

きん 気のせいだよ。

仙子 そうかしら…… (あっさり) 寝よう、お休み！

——間——

仙子 肘つて冷たいんね、まるで他にさわつてるみたい。…… ねえ、今日、お店でお客が、君は絵みみたいだナツて。

きん へえ、お前でも……

仙子 じゃけん、母ちゃん、お人好して云うんよ…… 洋服の代つたの見たことが無いって云う皮肉よ。

きん …… 成程…… うまいこと云う人だね。…… そいで今日は気嫌が悪かつたンかい。

仙子 別に、気嫌悪いことなんか無いじゃない。

きん しかし、お嫁に出すとなりや、洋服の一つも何とかせにやあ……

仙子 誰もお嫁に行くなんて言うてせんわ。

きん 松岡さん、今夜、お前が欲しいって、はっきり言いんさつたじゃないか。

仙子 松岡さんが勝手に言うただけよ、

きん お前達、三ヶ月も前に約束したんじやいうて、あの人云うてた……

仙子 (間——だし抜けに) ウチ、断つたん、昨日、その約束、(早口になつて)……

じゃけん今日、無理矢理、映画に誘い出したり、来んでええつて言うのに家まで送つて来て、慌てて母ちゃんに申込んだりしたんよ。…… それに…… それに母ちゃんたら、やたら何よ！…… 喜んで…… 二つ返事で出す様なこと云うて……

きん いけなんだか。

仙子 ウチ、しやせんで、結婚なんか。

きん 喧嘩したんかい。

仙子 そんなんじやないわ。

きん じゃ、どうして。

仙子 もういいわよ。

きん ええことはないさ。

仙子 嫌になったんよ、何も彼も……。どうでもいいわ、もう。  
きん そうかい。……まあ、あせることはない。泡食うて出世するんは洗濯屋だけじゃ云うけん。

仙子 母ちゃんにだって、理想があつたんじゃろ？

きん 理想？ そう、あつたさ。

仙子 どんなこと？

きん 街へ出て駄菓子屋開けたらと思うたこともあつたけんどナ、娘の頃にや……。

仙子 そんなこと、いったの……

きん だって、お前、三反百姓の六番目じゃもの、母さん。

仙子 それだけのことさえ、出来なんだんネ。

きん そんなでも、子供は三人位だと思うてたよ。

仙子 ……。どんなに一所懸命、脇目もふらずに働いたかて、どうにもなりやせんよ。

……折角、人の残業まで貰うたかて、二ヶ月たつても、スーツの一着も出来やしない……世の中によ、自家用車乗り廻して居る人も沢山いるって云うのに。

(遠くの踏切りで自動警鈴が鳴っている)

きん お前も、もう二十三だねえ。

仙子 十一時の上り特急だわ。

(やや遠くキーンと云う様な音を残して特急が走り去る――)

その後に残る、"お正月"のレコード

もう幾つ寝るとお正月……)

仙子 又はじめた、あの家、あのレコードしかないのね。

きん 角のアパートの二階さ。

仙子 ああ、真赤な電気がついてる……少し気が変なんじゃない？ 真赤な電気で、夜中にレコードかけたりして……。

きん 知らんかい、軍隊キャバレーとかに勤めて居る人だつて。……去年までは二ツ位いの可愛い女の子が居て、母さんが出かける時なんぞ、窓からよう手をふつてたよ。

仙子 ああ、いたいた。こつちも手を振つてやると、バイバイなんて云つてた。

きん お葬式が出た様子もないのに、急にいなくなっちゃってね、あの子……去年の夏頃だよ。

仙子 何処かに引取られたのかしら……。

きん さあねえ、私が早帰りの時、時々お風呂で一緒になるんだけど、聞いてみるのも何だしねえ、今でも金魚の形した石鹸箱使つてるよ。

(聞えて来る"お正月"の童謡)

仙子 忘れられないのね、あの子のことが……。

きん 世の中、上を見たらきりが無いし、下をみればもつともつとつらいんだつて居るのさ。……うちなんぞ、恵まれてる方さ。

仙子 そうかしら……。

きん こつちへ来んかい……一緒に寝るとぬくいで……。

仙子 ……うん、母ちゃんおいでよ、枕持つて……。

きん よっしゃ……どっこいしょ。(起き上つて来る)……もう一つ載せとこうな、母

さんのふとも……。

仙子 (母の立った姿を見て) 母ちゃんの寝巻き、進水式の満艦飾ね。

きん 手拭い縫合せたんじゃもの。

仙子 お酒屋に、喫茶店に、これは……マーケツト開き……。

きん 嫌だよ、寒い！……みんなチンドン屋の時分、開店祝の御祝儀に貰うたもんばっかしじゃ。

仙子 この寝巻、母さんの履歴書ネ。

きん ……これ、……ここここ、この宇品の洋品屋へ行った時だ、午から大雪になって了うた……。

(幻想としてチンドン屋の奏樂が聞えて来る)

きん ……朝からひやい日じゃった。始めの内は麩をちぎったみたいな牡丹雪でなあ……男衆は雪見で一杯出来るなんぞ云うてはしゃいでたんさ。……それが、夕方から沈むような粉雪になった……それ、一尺以上も積って、市電が止った日よ、お前も覚えとるじゃろう。……夜になると、人は誰も通りやせん、それでも縁起もんじゃ、景気をつけにや云うて、街から街へ練って廻ったんじゃ……遠くまで見える晩じゃった。ピチピチピチピチ顔へ雪は当たる。手は云うことを効かん。……ピラ撒かにならんで、母さんの軍手は指先がみんな摘んであったけえナア、冷うて冷うて、余んまり明るいで、母さん、お前と健チがどうしよるじゃろうか、そればっか気にかかって、やたらにピラ撒き散らしたった。……あの帰りにみんな食べたウドンの甘かったこと云うたら！……鼻水すすりすすり……あの時だけは、さすがの母さんも到々泣き出してすうた。男衆も

涙ポロポロ落して……畜生ッ！ 畜生ッ！ って吠えてさ。……どうしよるじゃろうのう、あの人ら……女形の源さん、ラッパの清さん、クラリネットの結城さん……みんな、ええ人ばかりじゃった。

(幻想の奏樂——暫く続いて消える)

仙子 母ちゃん、戻って来ると、いつも皺の間にこびりついたオシロイ、耳かきでこさげてたネ。

きん つまらんことばかり覚えとる。

仙子 母ちゃんは、そうやって、人のお祝いばっかし喜こんで来たんネ。

きん 祝いごとつてもんは、端でみてたつて楽しいもんさ。

仙子 母ちゃん、腹が立たんの、それで！

きん 子供三人かかえて二十年……もう立てる腹がのうなった。品切れよ。……今にお前にも判るさ。……腹を立てて腹を立てて、どんづまり、どうもなりやせん。

仙子 そうよ。じゃけん、ウチ、嫌になつたんよ。

きん (諭す様に) 母さんナ、何時もこう思うて来たんさ。土方に出た時分、雨の日云うと決つて櫓を組んで「蛸の足」を引っぱる。よいと巻きじゃった。歌を揃えてな、へんやあのおうえ、こらさつて……地固めよ。……綱の水が腕を伝うて、乳の上まで流れて行く。それに、請負いの旦那は、一寸バタバタでやって来て、さんざん文句をつけて行きよる……それでもさ、考えてみる、なんぼ流線型を乗り廻したつて、立派な家に立派な着物きてたつて、どんづまり、眠るお棺は誰だつて、一つなんじゃ、一つなんじやつてナ。

仙子 お店だつて同じよ、ウチら石鹸なんだつて。ゴシゴシ使うて、泡吹かせにや役に立たんだと、主任の奴……。

きん 成程、そりやそうじゃろ。

仙子 負けた、母ちゃん、資本家ネ。

きん まあええさ、お日様は誰も同じ様に照らしんさるんじゃ。

仙子 そのお日様だつて、この辺じゃ、煤煙のお蔭で茶色の色メガネ掛けてるワ。

きん それだけオマケがついとるんじゃから、ええやないか。

仙子 よう云わんわ。

きん ……世の中ちゆうもんは冷いもんよ。じゃけん云うて、背を向けたつて、やつぱり冷いだ。同じあいこなら、一足ずつでも風に向つて進んでゆくより仕方がなからうが。

仙子 母ちゃんて、亀みたい、ネ……兎と亀のカメよ。

きん じゃ、おきんじやのうて、おかめとするか。

仙子 おかめなら、今だつて……。

きん 馬鹿、お前だつてさ。

(二人、笑う)

仙子 (やや明るくなり) ……母さん、やつぱり、云つてるわ。この枕……ゴソゴソ、ゴソゴソ、ゴソゴソ……。

きん 神経病みだよ、この子は。

仙子 本当よ。……亀が這つてるみたい。

きん どれ、かしてみな(と、取りかえる) ……あれ、本当だ。ハハハハ、(一層高く)

ハハハハ……。

仙子 どうしたのよ？

きん そうかハハハハ……いや、の、……今日、少しばかり残つてた小豆に虫がついてたけん。干して、この枕に足したんよ。

仙子 なんだ、早よ言わんけん。

きん よう干したんじゃけどねえ。

仙子 知らんわ。

きん うん、鳴つとる鳴つとる。

仙子 この枕、母さんの匂いがするわ、椿油の……！

きん ……こんなおかめでも体一つで貰うてやろう云うて呉れんさるんじゃ。有難いもんよ。

仙子 (暫く間をおいて、急に――) ウチが他所へ嫁いで了うて、……いいの?! 母ちゃん本当にいいの?!

きん (のんびりと) ええさ。

仙子 母さん、どうするんよ!

きん まだまだ働けるよ。……働けるよ。働けんようになったら健一に見て貰う。

仙子 (感極まつて布団に顔を埋め) 有難う……母ちゃん!

音楽、すきま風のように忍び込んで――

きん 泣くことは無いよ、女の子がお嫁に行くんは当り前のことだもん。……なんぼ隠したつて、お前の気持ち位い、母さんに判らんでどうする。……ええ人らしいじゃない

か、松岡さん。……そう決ったら、母さんも、電気会社の集金せい出して歩かにやあ……  
…（ふと気が付いて）……なあ、あの人、お酒のむんじやないかい？

仙子 ……。

きん そうかい、やっぱり、飲みんさるかい。（一寸暗くなる）

仙子 でも、母ちゃん殴ったりしやせんわ。

きん フン、あんな孫の手みたいな拳骨で、殴ったって、この母さんに応えるもんか……

…この母さんの頬ぺたにや年季が入っとるんや、年季が……。

仙子 （泣き笑いで）威張ったわね。

きん そうよ！（力一杯に笑う）

仙子 （つられて笑おうとすると、泣けて来そうになる）お休みなさい。

きん さあ、今度こそ向うむいて、こうやって背中と背中、ぴったり合せて、……久し振りに母さんの子守唄うとうてやるで……。

（間）

相変わらず連結作業の音が遠く聞えている。

きん （低く幅の広い皺枯れ声で） ㇿやれ、えんやらのうえ、こらさ……（それは地

固めの時に歌う土工のリズムである――）

（二度、三度繰返すうちに、次第に声がかすれてくる）

仙子 （間） ……母ちゃん、二十年間、毎晩この天井の顔と話して来たんね……母ちゃん。

きん （返事がない）

仙子 （そっと）母ちゃん。

連結を終えた列車が息々々、力強く――次第に速さを増して去ってゆく。

音楽（かぶせて）テーマ。

（終）